

2022年10月23日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

「憐れみ深く、ただしい神」

(ハイデルベルク信仰問答 第一部 問 9～11) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】

【招詞】エゼキエル書 36 : 26a

【祈祷】

天の父なる神さま

今朝もわたしたちに、新しい朝、新しい命、新しい主の日を与えて下さり、一人一人の名前を呼んで、この礼拝へと招いて下さったことを、心から感謝いたします。この一週間の日々も、あなたの恵みに支えられ、御手に守られて歩んで参りました。しかし、わたしたちは神さまの恵みを忘れ、自己中心的に歩み、祈りを忘れ、御前に出るにふさわしくない、罪深い歩みをしてきたことを覚えます。どうかお赦し下さい。今日、また聖霊によって、御心に適った者へと、わたしたちの心を新しく造り変えて下さい。

これから共に御言葉に耳を傾けます。聖霊なる神さまが、語る者、聞く者に豊かに働いて下さり、より深く聖書の御言葉の恵みを知り、信仰の喜びに生きることが出来ますよう、導いて下さい。この礼拝において、生きておられるイエスさまとの、恵み豊かな交わりが与えられ、わたしたちの信仰が、ますます強められ、励まされますように。

また、今日の礼拝を覚えながら、様々な事情によって共に集うことが出来ない兄弟姉妹を覚えます。特に体の不調や、弱さを覚えている者に癒しを、また信仰の悩みの中にある者に、あなたの支えと導きをお与え下さい。それぞれが置かれている場所で、聖霊なる神さまが、一人一人の心を神さまの御許へと導いて下さり、御言葉を与え、この礼拝の恵みと祝福に、共に与らせて下さいますように。

神さま、世界における人間の、わたしたちの、愚かな歩みを赦し、憐れんで下さい。国々の為政者を導いて下さい。また、混乱の中で、悲しみ、怒り、憎しみ、嘆きの中にある人々を救って下さり、どうか慰めとまことの平和をお与え下さい。とりわけ、小さい者、弱い者たちを、あなたの御手によってお守りください。

わたしたちもまた、あなたの御心がこの地になるように祈りつつ、自分自身がまず、神さまの御心に従って、あなたを愛し、また隣人を愛する者となることが出来ますように。

神さま、今日、御前に礼拝をささげている、地上のすべての教会を祝して下さい。イエスさまの福音を力強く宣べ伝えることが出来ますように。また、神さまの御心に従い、ご栄光を現わす群れとなることが出来ますように。

このお祈りを、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【聖書】創世記 3 : 1～7

ローマの信徒への手紙 1 : 16～18

【説教】「憐れみ深く、ただしい神」

<罪と悲惨>

ハイデルベルク信仰問答に基づいて、聖書の御言葉を聞いています。今日は、第一部「人間の悲惨さについて」の最後の部分です。これまでのところでは、人は自分ではどうしようもない罪に捕らえられていて、悲惨な状態にあるということ。しかし、本来人間は、神さまに良いものとして造られたのだ、ということが語られていました。

人間は、神さまに良いものとして、神のかたちに似せて造られました。それは、神さまの愛に応答する者として、神さまとの愛の交わりに生きる者として造られたということです。

神さまとの良い関係の中で、神さまに属するものとして生きること。それが、わたしたちの在るべき姿であり、生きるべき場所であり、最も幸いなことであつたはずなのです。

しかし、わたしたちは神を愛することのできない、隣人を愛することのできない、罪の現実の中に生きています。自分ではどうしようもない罪です。そうしてわたしたちは、神さまから離れて、生きるべき場所、故郷を失って、悲惨の中を生きているのです。

ハイデルベルク信仰問答は、「わたしたちの本性は毒され、…罪のうちにはらまれて生まれてくる」とか。「どのような善に対しても全く無能で、あらゆる悪に傾いている」とか。徹底的に、わたしたちが墮落してしまっており、自分自身ではどうしようもない罪に捕らえられていることを、はっきりと告げてきました。

でも、中々自分の悪い所を認めたくないのが、わたしたち人間です。そのようなわたしたちの悪あがきのような問いが、今日の間答に示されています。

<神さまの不正？>

それでは、問9を読んでみます。「御自身の律法において人ができないようなことを求めるとは、神は人に対して不正を犯しているのではありませんか。」

わたしたち人間は、徹底的に悪に傾いていて、罪に捕らえられていて、神さまの律法、つまり、神さまが求めておられること。神を愛すること、隣人を自分のように愛することが出来ない、と明らかにされました。

でも、自分ではどうしようもない罪に捕らわれているのなら、そんなわたしに出来ないことを求める神さまの方が悪いのではないか。こんな罪人であるわたしに、愛することを求める神さまの方が正しくない。不正を犯しているのではないか。そんな問いです。

神さまが求めておられることに背いて、人が罪を犯してしまう様子は、旧約聖書の創世記2～3章に具体的な物語として示されていました。

今日は3章を読みましたが、2章から見ると、神さまは人をお造りになり、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた、とあります。そして、こう命じられました。2:16「主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。』」

すべての木から取って食べてよい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。たくさんの恵みと、あらゆる自由が与えられていました。しかしその中に、たった一つの禁止事項があったのです。そして、今日読まれた3章にあった通り、アダムとエバは蛇に唆され、自らの意志で、そのたった一つの神さまのご命令に背いてしまったのです。

ところで、この物語を聞いて、こう考えたことがある方がいるかも知れません。

「神さまは、食べてはいけない木を、初めからエデンの園に植えなければよかったのではないか。そんな木が初めから無ければ、人間が罪を犯す可能性も一切なかったのに。」

でも、もし罪を犯す可能性が一切ないところに、人間が置かれていたのだとしたら。初めから神さまのご命令そのものが無かったとしたら。その人間は、果たして本当に、自由な意志を持って、自ら神さまに従って生きていると言えるでしょうか。そのような人間は、果たして本当に、自由に神さまに応答し、神さまを愛する存在であると、言えるでしょうか。

愛に応える、相手と愛し合う、という関係は、お互いに本当の自由を持ち、お互いの意志や人格を尊重して、認め合う関係でなければ成立しません。

もし、誰かが結婚を申し込んだとして、それを受ける側の人に、初めから受け入れることしか選択肢がなかったとしたら。そもそも断ることが出来ない状況だったなら。そこには、本当に愛があると言えるのでしょうか。

応える自由も、応えない自由もある。その中で、喜んで応えるからこそ、自らの思いで愛するからこそ、双方は互いを重んじることができ、人格的な交わりを築くことができ、本当の愛の関係を結ぶことが出来るのです。どちらかに選択肢が無かったのだとしたら、自由が無いのだとしたら、それは人格的な関係ではなく、主従関係、隷属関係です。

そもそも、永遠から永遠にいます神さまと、その神さまに造られた被造物である人間の間には、圧倒的な違いがあります。しかし、神さまは、人間をご自分のかたちに似せて造られました。それは、人間が人格のないロボットではなく、自由の無い奴隷でもなく、まるで神さまと対等であるかのように、重い価値のある、尊厳ある存在として造られた。神さまと人格的な関係を築き、愛し合うことが出来るものとして造られた、ということなのです。

人間は、何でも言うことを聞き、神さまの思い通りに「はい」と返事をするロボットのようには造られたものではありません。

ですから、善悪を知る木から食べてはならない、という神さまのご命令は、御言葉に従うことも、従わないことも出来る。人間にそのような自由が与えられていることを示しているのです。

神さまが人間に、御言葉に従うか、従わないかを問われたのは、神さまと人間との良い関係を続けるか否かを問われたということです。

もちろん神さまは、人間がご自分の愛に応えて、ご自分の信頼に応えて、その御言葉を守り続け、共に愛の関係に生き続けることを、心から願っておられました。

神さまは、人間をそのようなものとして、人格的な、価値ある存在として、ご自分に似せて、ご自分の形に、ご自分と愛の交わりを持てる者としてお造りになったからです。

それが、問9の答え、「神は人がそれを行なえるように人を創造されたからです」、ということ。神さまは、人間が、神さまの律法に、御言葉に、愛に、お応えすることができるように、人を創造されたのです。

だから、わたしたちが罪を犯したのは、神さまの不正などではありません。ただひたすら、わたしたちの「身勝手な不従順」によるのです。わたしたちは存在の根っこから罪に捕らえられており、与えられた自由を、もはや神さまが喜ぶように用いることが出来ないのです。

人間の方が、神さまの御言葉に従うこと、神さまの正しさに生きること、神さまとの良い関係に生きることを拒みました。「善悪を知る木」から食べ、自分で善悪を判断する者となり、神のようになること。つまり、神さまの善悪の基準、神さまの正しさに従うのではなく、自分の善悪の基準、自分の正しさに従う生き方を選んだのです。神さまはいらないと言って、自分が神のようになろうとしたのです。

そうして人間は、神さまとの関係を破壊し、自ら神のかたちを壊してしまいました。

また、そのように人それぞれが、自分の身勝手な基準、身勝手な正しさに生きることになり、隣人を受け入れられなくなり、愛することができなくなりました。

ここに、わたしたちの罪、わたしたちの悲惨さがあるのです。

<甘い考え>

さて、わたしたちの罪は、神さまの不正によるのではない。わたしたちが正しくないのだ。わたしたちの不正によるのだ。そう告げられました。

もう言い逃れは出来ません。でもさらに、人間はあがきます。ハイデルベルク信仰問答は、わたしたちの弱さや、疑いや、つまずきを、本当によく知っているようです。

問10～11は、わたしたち人間の、甘い考えを代弁しています。まず問10は「神はどのような不従順と背反とを罰せずに見逃されるのですか。」と問います。

罪が、神さまの不正ではなく、わたしたちの不正であることはよく分かりました。

でも、神さまはわたしを愛して下さっているのですから、わたしたちの不正も愛によって受け入れてくれるのではありませんか？何でもゆるして下さるのではありませんか？と問うのです。

しかし、答えはNoです。「断じてそうではありません。」

ここでは、神さまはわたしたちの罪に対して激しく怒っておられ、それらをただしい裁きによって罰せられる、と語られています。しかも、この世においても、永遠にわたしても罰したもう、と。そして、神さまの御言葉に背く罪を犯す者、律法を守らない者は皆、呪われていると、神さまがお語りになっている。そう、告げるのです。

さて、問いを重ねるごとに、わたしたちは自分たちの罪の深刻さをいよいよ見つめさせられていきます。少し怖くなってきました。

それで、問 11 です。「しかし、神は憐れみ深い方でもありませんか。」何とか、神さまの憐れみにすがって、自分の不正を、罪を、見逃してもらえないか、と食い下がるのです。

答えはこうです。「確かに神は憐れみ深い方ですが、またただしい方でもあられます。ですから、神の義は、神の至高の尊厳に対して犯される罪が、同じく最高の、すなわち永遠の刑罰をもって 体と魂とにおいて罰せられることを要求するのです。」

<神の義>

神さまは、確かに憐れみ深いお方です。しかし同時に、義なるお方です。

神さまが、まことの義を持つ方である。まことに正しい方である。それは、不正を一切受け入れない、ということです。罪があるなら、それに対する償いがきちんとなされるのでなければ、赦されない、ということです。

本当に正しい裁判官が、きちんと罪を裁かず、それを曖昧にして、罪人の犯した不正をゆるしてしまふ。見逃してやる。そんなことはあり得ません。それでは、「正しさ」が通りません。不正を受け入れる正しさ、などというものは、あり得ないのです。

神さまはまことの義なる方、まことに正しいお方です。ですから、わたしたちの罪を見逃したり、なかったことにはなさいません。神さまは必ず、罪をただしく裁かれるのです。

神さまが、そのように人間の罪に対して、まことに真剣に怒り、厳しく対峙されるのは、人間の存在を、それだけ神さまが重んじておられるからです。ご自分のかたちに似せて造り、価値ある存在、愛を与える存在、恵みを注ぐ存在、かけがえのない存在として、見つめて下さっている。だからこそ、この神のかたちを破壊し、応答をやめ、神さまを捨て去り、御言葉に背くということは、神さまの愛を裏切ることであり、神さまの尊厳を蔑ろにすることであり、神さまのご栄光を汚そうとするようなことなのです。

もし、それを神さまが見逃し、放置されるなら。罪を曖昧にして、なかったことにされるなら。それは、わたしたち人間がどうしてもよい存在であるということです。

また、神さまの尊厳が汚されてもそのままにされるなら、それは、そのままでも良いような程度のものである、ということです。そんなことは、全くあり得ません。

ですから、神さまは見逃してくれないのですか、憐れんで、罪を裁くことをやめてくれないのですか、という問いに対して、問 11 の答えはこう言うのです。

「確かに神は憐れみ深い方ですが、またただしい方でもあられます。ですから、神の義は、神の至高の尊厳に対して犯される罪が、同じく最高の、すなわち永遠の刑罰をもって体と魂とにおいて罰せられることを要求するのです。」

<救いへ>

神さまに対して犯した罪は、「神の至高の尊厳に対して犯される罪」と言われています。

この罪は「同じく最高の、永遠の刑罰をもって体と魂において罰せられる」ほどの罪です。

このような神さまの激しい怒りと、ただしい裁き、そして永遠の罰は、わたしたち人間に耐えられるものではありません。しかし、神の義のゆえに。神さまがまことにただしいお方であるがゆえに。罪を犯した者は、神さまのただしい裁きを受け、それに値する償い、つまり、永遠の刑罰をもって体と魂において罰せられなければなりません。

さて、ここで忘れてはならないのは、ハイデルベルク信仰問答は、わたしたちがキリストのものであるという慰めを教えようとしている、ということです。ハイデルベルクは、第一部で、このわたしたちの悲惨な罪の現実を語ってから、わたしたちがどのようにして救われたかという、第二部へと進んでいくのです。

わたしたちは、第一部で、自分の罪をはっきりと告げられました。自分ではどうしようもない罪にあり、自分で自分を救うことは出来ないということ。しかし、罪は必ずただしく裁かれなければならない、ということを知りました。

そして、そこに示される唯一の救いの道が、神の御子、イエス・キリストなのです。

イエスさまは、自分の罪を自分で償うことさえ出来ないわたしたちのために、神さまがお遣わし下さった救い主です。このイエスさまが、わたしたちの罪を担い、わたしたちの代わりに裁かれ、わたしたちの代わりに永遠の刑罰をその身に負って、十字架に架かって死んで下さるのです。

イエスさまの十字架の苦しみと死に、「体と魂において罰せられる」「永遠の刑罰」の厳しさが現わされています。あのイエスさまの苦しみと絶望の叫びは、本来は罪人であるわたしが叫ぶべきものでした。神の呪いを受けるのは、律法に背いたわたしであったはずでした。

しかし、神さまは、ご自分の愛する独りに、その裁きと呪いをすべて負わせられました。このイエスさまの尊い血によって、わたしたちすべての人間の罪を償わせられました。こうして、イエスさまによって、わたしたちに「神の義」が貫かれたのです。

今日読まれたローマの信徒への手紙 1：16 には、「福音には神の義が啓示されています」とありました。福音とは、良い知らせ。神の御子が、十字架によってわたしたちの罪を贖い、それを成し遂げ、復活されたという、救いの知らせのことです。

ここに、神の義が啓示されている。神の義が、現わされている。それはまさに、イエスさまの十字架の死と復活によって、わたしたちの罪が完全に償われたということが、はっきり告げられているということです。

わたしたちは、自分がどれほどの罪に値するか。神さまの御言葉に背き、神さまから離れ、自分を神のようにして生きる罪が、どれほど深く思い罪であるかを、きちんと見つめなければなりません。そうでなければ、あのイエスさまの十字架の苦しみと死が、わたしの罪のためであったということ、真剣に受け止めることは出来ないのです。

そしてまた、わたしたちが同時に知るべきは、神さまの義が現わされた、このイエスさまの十字架にこそ、神さまの愛と憐れみが現されているということです。

神さまに敵対し、裏切り、離れ、捨て去ったわたしたちです。もし、わたしたちなら、自分にそのようなことをした相手がいたなら、それにふさわしい罰を受けて、苦しんで罪を償うことを求めるでしょう。

しかし、神さまはわたしたちがその裁きに耐えられないことをよくご存知でした。神さまは、確かにわたしたちの罪に対して、激しく怒っておられました。しかしまた同時に、わたしたちを愛することをおやめにならず、深い憐れみの心をもって、わたしたちが再び神さまとの良い関係に生きること。罪を悔い改めて、新しく生きる者となることを望んで下さったのです。

神の御子イエスさまの十字架には、神さまの義と、神さまの愛が、同時に、究極的に現わされているのです。

このイエスさまの十字架の御前に立って、この罪の赦しの中で、わたしたちは自分の罪を知らされ、また神さまの愛を知らされます。イエスさまが共にいて下さるからこそ、わたしたちは神さまの御前に、罪の償いを終えた者のように、罪を赦された者として立つことが出来ます。

そして、再び神さまの御言葉を聞くことが出来るのです。神を愛しなさい。隣人を自分のように愛しなさい。

罪を赦されたわたしたちは、イエスさまによって、聖霊によって、再び神のかたちを回復させられます。そして、神さまの愛に、自由に、喜んで、お応えする者となることが出来ます。また、隣人のことを、共に神さまに愛され、共に罪を赦された者として、自分のように愛する者となることが出来るのです。

イエスさまのもの、神さまのものであるわたしたちは、神さまのご栄光のかたちをいただいた者として。神さまの輝きを映し出す者として。自由な喜びをもって神さまを礼拝しつつ、御言葉に従って、与えられた地上の日々を歩んでいきたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは、そのただしさに従って、わたしたちの罪を裁かれます。しかし、あなたの愛と憐れみによって、その罪の償いを、あなたの御子イエスさまに負わせられました。あなたがまことにただしい方であること。また、そのあなたに、わたしたちがどれほど愛され、憐れまれているかということ。そのことを、驚きと喜びをもって、心から感謝いたします。

どうか、わたしたちが、イエスさまの十字架によって罪を贖われたことを、感謝をもって信じ、一人一人が罪を悔い改め、神さまの愛に、喜んで、心から応える者となることが出来るようにして下さい。そして、神を愛し、隣人を愛しなさいとの御言葉に、喜んで従い、神さまのご栄光を現わす者とならせて下さい。

このお祈りをイエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 4 4 1 「信仰をもて」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 2 9 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン